

盛岡市動物公園再生事業計画

2019年10月

【2020年8月修正版】

盛岡市 都市整備部

盛岡市動物公園再生事業計画

「岩山南公園を活用した観光振興及び地域活性化のための基盤整備調査」抜粋

1 動物公園再生の目的

(1) 動物公園の自立した運営の実現

動物公園の経営は収益の約86%を市からの収入が占めており、市財政への依存度は高い状況にある。今後とも一定の市財政負担は必要となるが、新たな運営組織の下、様々な収益コンテンツを導入し、民間が稼ぐことで過度に公的な支援に依存することのない健全な動物公園の運営を目指す。

(2) 市の行財政負担の軽減

動物公園の運営に対し市が拠出している財政負担額は、開園当初から増加を続け、2017年時点で約2億6,000万円となっている。今後、人口減少に伴い、広域圏の人口自体の減少が見込まれる中、2040年以降は市の財政負担額が約3億2,000万円まで増加する見通しとなっている。人口減少に伴う市税収入の減少が予測される中、現状よりも市の財政負担を軽減し、健全な自治体経営に寄与することが求められる。

(3) 新たな社会教育施設としての役割をつくる

開園時から動物公園は、生命の尊さや自然環境の保全、生き物を愛する心を育む社会教育の場としての役割を掲げてきた。これは開園時から続く動物公園の重要な役割であり、今後も継続される普遍的な役割である。動物との触れ合いや野生動物の置かれている環境を学ぶことを通じて、時代や環境の変化の中で人間が自然環境の中でどのように行動すべきかを考える機会を提供する。また、行動変容につなげてこそ教育の意義があるという考えに基づき、単に知識を得るだけではなく、実際に活動に参加する教育プログラムや活動を継続する支援プログラムを構築していく。

2 コンセプト

『人と動物と自然が、共生する動物公園 ～人と動物が参加する、新しい福祉の形～』

動物公園がある岩山エリアは、人間の世界である盛岡市街地と動物の世界である北上山地との境界に位置している。人と動物たちが、中間領域・境界にあればこそ、互いを対等にいたわり合うことが出来る場となることを目指し、非日常的な動物園ではなく、より日常的な動物公園として再生する。

3 動物公園としてのあり方

(1) めざす姿『人と動物、都市と自然が共生する環境公園』

動物公園は、人と動物の関わりを通じて多様で複雑な生きものの関係性「生物多様性」の尊さを伝えるため、岩山の立地や自然環境を活用し、都市と自然が共生できる持続可能な環境モデルとしての総合公園「環境公園」をめざす。生命や自然の不思議さを探求する知的好奇心と地球環境を守るための倫理を育み、共感を得ることができる市民文化を創造する。

(2) 使命

ア 豊かな地球環境を後世に残していくため環境教育を推進する

人と動物の関わり方、人と自然環境の関わり方を体験から学び、野生動物の保護や自然環境の保全について考える機会を提供する。

イ 高い水準の飼育技術を維持するため研究活動を推進する

高水準の飼育技術の実現のため、大学や研究機関、動物施設と連携し、動物福祉(アニマルウェルフェア)の向上と生物多様性保全への寄与を目指して、様々な動物の調査研究を総合的に行う。

ウ 常に先駆的な動物園であることをめざし挑戦できる人材を育成する

新しい取組に挑戦し地域貢献を継続していくため、未来の動物園への夢を持つ動物園人、人材交流や共同研究などを通じて新しい動物園モデルを発信できる人材を育成する。

(3) 展示方針『展示ストーリーとメッセージ』

動物の飼育展示環境では、動物への配慮と人間（来園者や飼育技術者）への配慮が両立されるべきであり、これが展示ストーリーの基本となる。

ア 動物への配慮として、それぞれの動物の生態や行動における適正な状態が実現されるように、動物福祉（アニマルウェルフェア）を考えた施設とする。

イ 人間への配慮として、ストーリー性のあるゾーニング、メッセージ性のある展示デザインとサインにより、知的欲求が満たされ、楽しさを感じられる施設とする。

(4) 飼育方針『課題と選択の機会の提供』

動物種毎に適した刺激を与え、動物の生活環境を絶えず変化させること（環境エンリッチメント）により、その種が本来持っている多様な行動パターンを発現する機会を提供し、動物が選択することにより動物本来の行動を引き出し、飼育動物のクオリティ・オブ・ライフを高め維持する。

(5) 繁殖・収集方針『盛岡ならではの特色と持続可能性』

動物の繁殖・収集は、計画的でかつ独自性を持って行う必要がある。そのためには、展示方針や飼育方針、将来の飼育頭数維持の可能性などを考慮し、高水準のアニマルウェルフェアを保証しながら検討するべきである。

盛岡市動物公園のシンボリックな動物はニホンイヌワシであり、生物多様性保全の観点からも、ニホンイヌワシのような動物の保護と繁殖、そのための環境教育を進める必要がある。

また、海外産動物など、今後入手困難な動物種の飼育継続は長期的な視点から検討する。

4 動物公園利用者が体験するストーリー

動物公園の利用者がストーリー感を体験する整備をするため4つのゾーンに分け、それぞれに特徴を持たせ、入口から終着点まで楽しさやワクワクが途切れることのない、歩いて楽しい動物公園を目指す。

そのためには、動物の飼育と展示では、人にとっても動物にとっても幸せな場所となるように施設を整備し事業展開する。また、オリジナリティーある動物公園となるように、岩山の自然環境を十分に活用した施設や園路の配置をする。

この考え方をベースに、ランドスケープ設計において具体化する。

(1) プロローグ・エピローグ

エントランスの盛り上がりの創出とインフォメーションの整理により、興奮や期待感を高める。

(2) 第1場「里山に生きる」

盛岡らしい里山の雑木林のような動物展示と植栽の整備により、里山に入り込むような感覚を体験し、林道の途中には、地形を活かして見渡すことができるビューポイントを設ける。

(3) 第2場「高原の営み」

高原の牧草地をイメージした整備とし、子ども動物園にいる家畜などの動物と人の営みや、芝生空間の開放感を感じさせるデザインとし、人にも動物にも居心地の良い空間とする。

(4) 第3場「母なる大地」

物語のクライマックスとして、非日常的で開放感のあるアフリカのサバンナを眺められる広場を演出し、興奮や感動を共有する時間と場所を提供する。

第二場

「高原の営み」

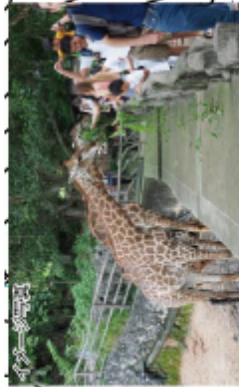
高原に生きる動物と人の営みと
芝生空間の開放感を感じさせる



第三場

「母なる大地」

物語のクライマックスとして、
落ち着いてサバンナを眺められる広場を整備



第一場

「里山に生きる」

里山に入り込む感覚を体験



「プロローグ・エピローグ」

エントランスの盛り上がりの創出
— ナインアオメーションの整理



- 建物名
- 1 セミナーハウス
 - 2 売店展望台
 - 3 屋外便所1
 - 4 ノウサキ舎
 - 5 テンバウピシム舎
 - 6 アサガマ舎
 - 7 シカ舎
 - 8 リク舎
 - 9 クヌキ・キツネ舎
 - 10 クマ・イノシシ舎
 - 11 レスタハウス売店
 - 12 カナダカワウソ舎
 - 13 ヒューマ舎
 - 14 オオツツピソジ舎

- 16 アライグマ舎
- 17 ニホンカモシカ舎
- 18 子供委員
- 19 鳥類ケージ
- 20 コンタクト舎
- 21 アニマルファーム舎
- 22 アヒル池
- 23 ウサギ・モルモット舎
- 24 屋外便所2
- 25 アニマルライド舎
- 26 草原ゾーン
- 27 プレリーリードック舎
- 28 ソウ舎
- 29 ライオン舎
- 30 サイ・フアミンゴ舎

- 31 キリン・シマウマ舎
- 32 休憩所(レストハウス売店)
- 33 シンマママホコ舎
- 34 イヌワン舎
- 35 鳥類舎2
- 36 動物広場
- 37 フリールディングエリア舎
- 38 ホンアブ場
- 39 倉庫
- 40 車庫
- 41 飼育管理事務所
- 42 屋外便所3
- 43 屋外便所3
- 44 堆肥集積所
- 45 焼却炉

図表 25 : ゾーニング図

※ランドスケープ設計において具体化

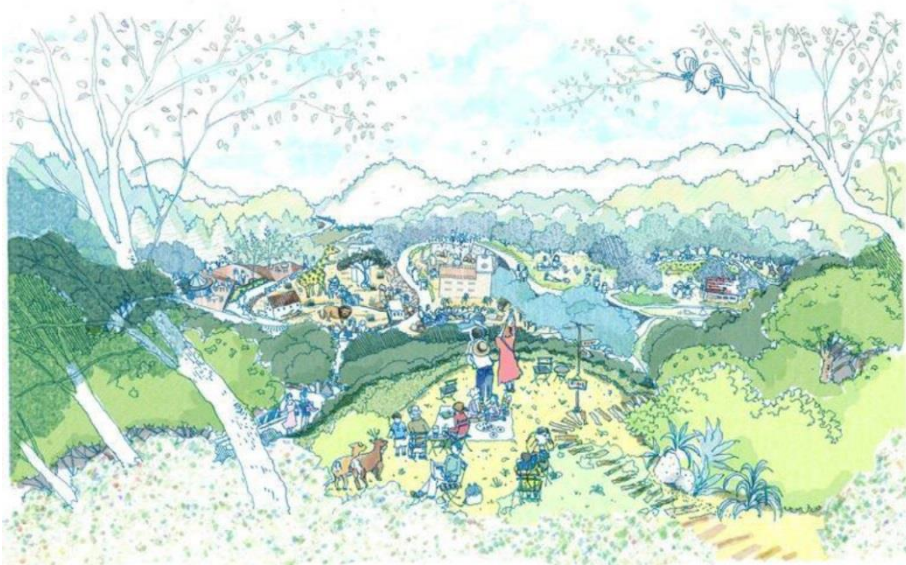
プロローグ・エピローグ エントランスの盛り上がりの創出+インフォメーションの整理

動物公園のエントランスは物語に例えるならプロローグの部分であり、これから踏み入れる動物の世界に胸を躍らせ、興奮や期待感を高める場所である。入口の切れ込みの傾斜を利用した動物の展示等により、動物公園に到着した際のワクワク感を演出する。エントランス部分では、入り口動線の視線を受け止めるアイキャッチのデザインと公園内全体の情報を手に入れることができるサインをデザインすることで、情報が視覚的にすぐに整理できるインフォメーション空間として整備する。また、物語の始まりであり終わりでもある広場空間として、人の滞留できる空間として整備する。



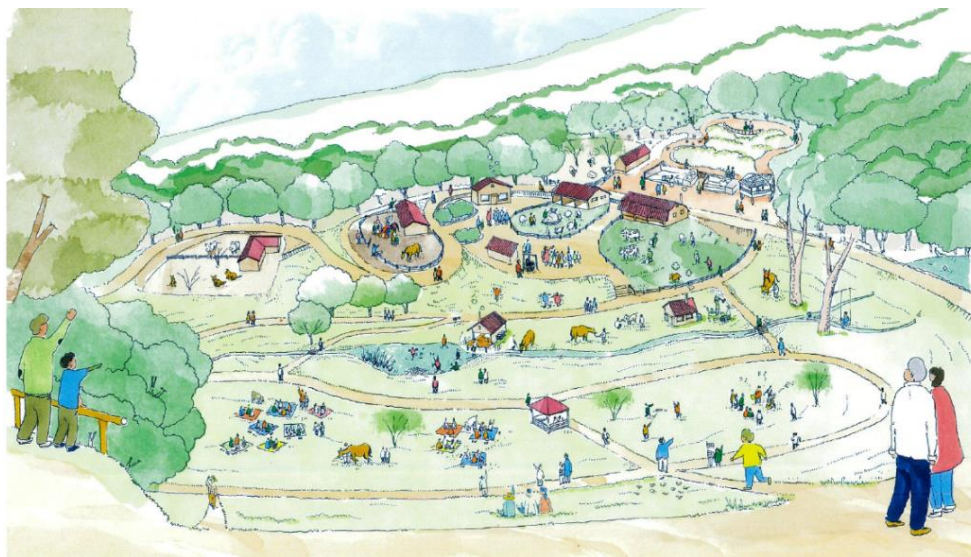
第1場「里山に生きる」

プロローグのエリアを抜けた先に広がる第1場は里山の自然を感じることで出来る空間である。盛岡の日常的な里山の雑木林を抜ける脇には、里山と一体的にデザインされ、里山に入り込んだような展示や植栽が計画的に整備されている。林道の途中で、地形を活かし動物公園全体を見渡すことが出来るビューポイントに到着する。全体が見渡すことが出来るよう、植栽を間引き、動物公園が本来持つ眺望の良さを最大限生かす工夫が必要になる。その際、アカマツを中心に間引くことで、より雑木林に近い状態へと遷移させる。



第2場「高原の営み」

第2場からは異国の雰囲気のある高原の牧草地をイメージした空間づくりを行う。植栽を丁寧に適切に間引くことで、芝生広場とこども動物園のエリアに一体的な開放感を形成する。園路の先に広がる高原の植物や家畜たちの生き生きとした姿を見ながら、さらに楽しさや期待感を高める場所である。木陰や沢などを活用し、動物たちにとっても居心地の良い場所を選択できるよう、微気候の変化のあるランドスケープとする。



第3場「母なる大地」

終着点である第3場は、非日常的で開放的なサバンナの草原を擬似植生などにより演出する。現在唐突に終わる印象を与える終着点付近に周回路を整備し、唐突な印象を和らげる。現在のライオン舎の西側の場所に、谷地形を活かし、サバンナを見下ろせる広場空間を整備することで、ここまでに感じた興奮や感動を共有するなど余韻にひたる時間や場所を提供する。さらに、二ホンイヌワシ舎との間の植栽も間引くことで、二ホンイヌワシ舎を見られるようにし、その周囲にも、サバンナを見下ろせる広場空間を整備する。



5 施設修繕及び施設整備等

(1) 施設修繕及び展示の改善

- 老朽化した施設の修繕とともに、動物の姿を魅力的かつ効果的に見せるための展示方法の改善
- ア 老朽化の著しい獣舎を中心とした修繕（鉄部分の補修，展示場の土留め，雨漏り補修等）
 - イ 観覧者の近くで迫力ある動物の姿を見ることができる「ガラス展示の導入」，雑木林に馴染むような展示施設の改修による「里山の自然との一体感の演出」等（展示の改善）
 - ウ 「広々としたデッキの設置」により，ゆったりと動物を観覧できるスポット等（休憩場所の増設）
 - エ 全園的に統一感のある魅力的かつ効果的な「サインリニューアル」
 - オ 「レストハウスの改修」による新たな休憩場所と飲食等収益の増加

(2) 施設整備等（交付金の活用を予定）

- 岩山の自然等を活かした公園としての魅力アップのための園内の既存施設や自然環境の整備
- ア 修景施設の改修（長期間未整備状態の植栽，樹木の伐採，剪定等）による，里山としての「岩山の自然の魅力アップ」，地形を活かした「ビューポイント」の設置，自然散策なども楽しめる公園としての機能の拡張
 - イ 入園ゲート近くにある「セミナーハウスの改修」により，入園した来園者のワクワク感の創出，各種インフォメーションと休憩場所としてのセンター機能の強化
 - ウ 園路の整備等により，広い園内を楽しみながら歩くことができる公園

(3) 上水道整備

老朽化により近々に必要となる上水道施設の整備を，リニューアル工事と一体的に行うことで，市財政負担を軽減

(4) その他の整備

- 本事業の理念・コンセプトに寄与する施設等の整備
- なお，整備資金については，企業版ふるさと納税（地方創生応援税制）の活用やガバメントクラウドファンディングの導入検討など，財源確保と市財政負担の軽減を図る。
- ア 老朽化した動物病院を改築（移転）し，来園者に「見せる」施設とすることで学びの場（社会教育施設）としての役割を果たす。
 - イ 動物福祉の向上に寄与する獣舎等施設の整備
 - ウ 自然環境の保全に寄与する施設等の整備
 - エ その他本事業の理念・コンセプトに合致する施設等の整備 など

(5) 現状写真



<天井雨漏れ>



<サイン改修>



<展示修繕・土留め改修>

6 事業スケジュール

- (1) 第1フェーズ 公共による投資で、施設修繕を行い、エリア価値の上昇局面を作る
- (2) 第2フェーズ 官民で連携して投資を行い、エリア価値を上昇させることで、民間投資の環境を作る
- (3) 第3フェーズ 連鎖的に更なる民間投資誘導が喚起されるような好循環をつくり出す

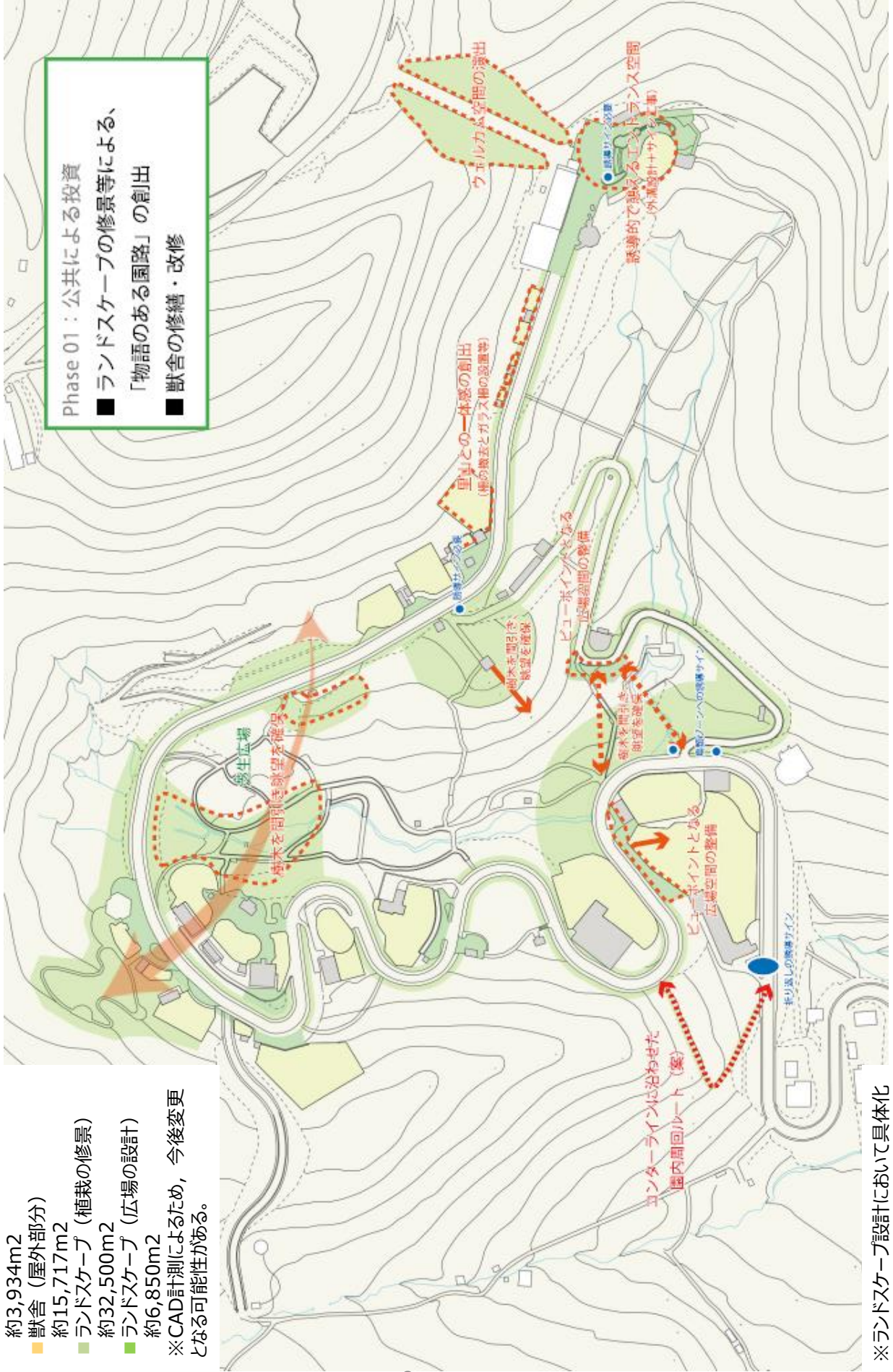


※第2・第3フェーズの事業については、第1フェーズのリニューアル効果や社会経済情勢等を勘案した上で、民間事業者が市と協議して実施する。

工事対象箇所の面積

- 獣舎（建物部分）
約3,934m²
- 獣舎（屋外部分）
約15,717m²
- ランドスケープ（植栽の修景）
約32,500m²
- ランドスケープ（広場の設計）
約6,850m²

※CAD計測によるため、今後変更となる可能性がある。



Phase 02：公民連携による投資

■ レストハウス（北側）のリノベーション

- ・ 1F 障がい者就労支援（チーズ・チョコレート工場）：約50㎡
- ・ 2F 宿泊施設（ホテル）：約180㎡

Phase 02：公民連携による投資

■ セミナーハウスのリノベーション

- ・ 1F 売店、展示室、ライブラリー、事務所等：約880㎡
- ・ 2F レクチャールーム等：約350㎡

Phase 02：公民連携による投資

■ レストハウス（南側）のリノベーション

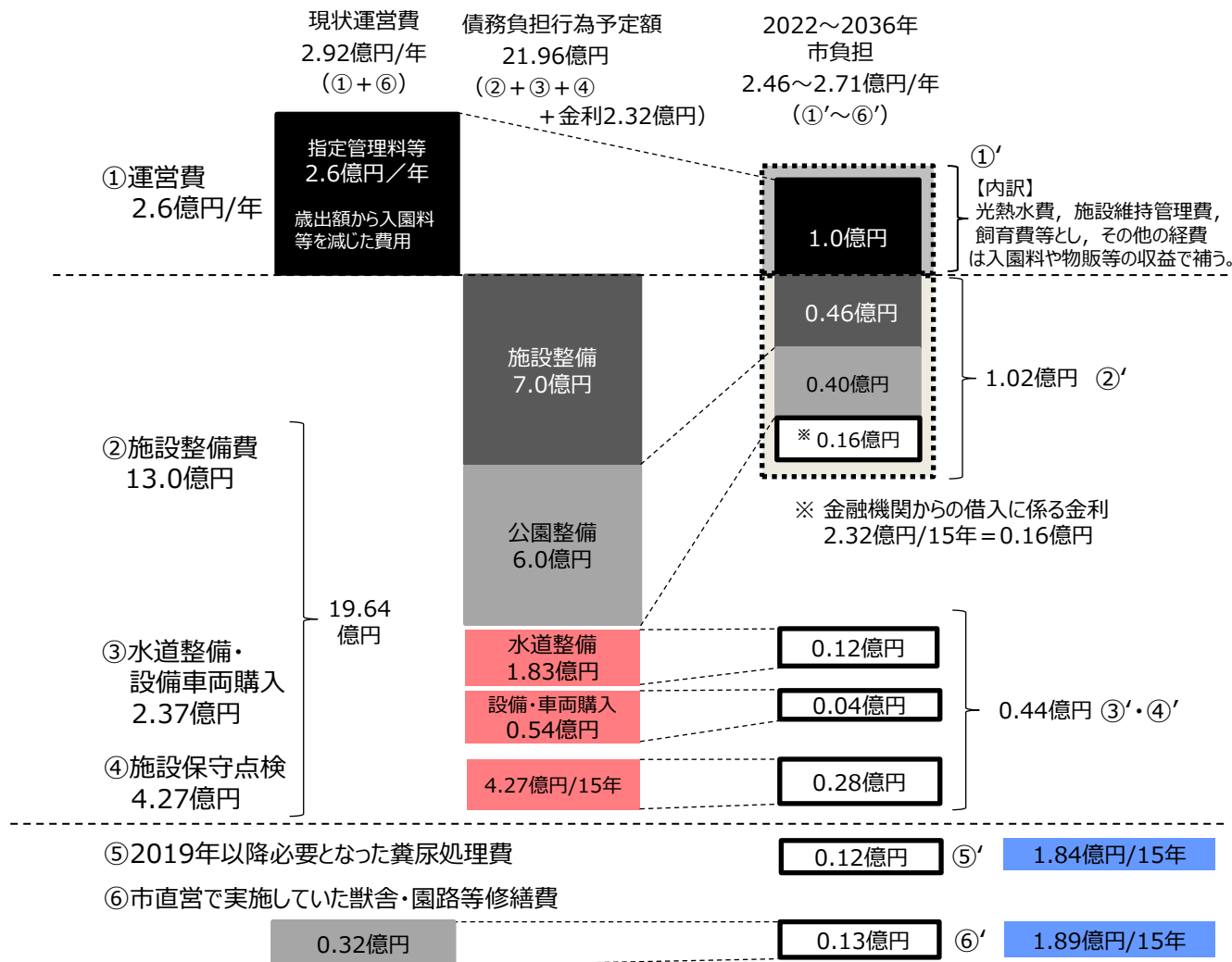
- ・ 1F 飲食（工場併設レストラン）：約210㎡
- ・ テラスの増設：約100㎡

眺めの良い
テラスを整備

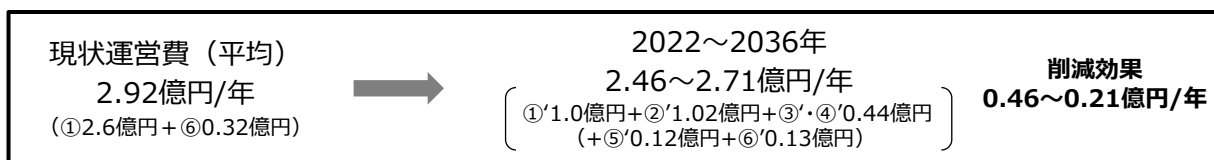
7 市の財政負担推移イメージ

現在の市の年間の指定管理料等2.6億円を1.0億円に圧縮する。市は、光熱水費、施設維持管理費、動物購入費及び飼料費等として指定管理料を支払い、その他の経費は新たな運営会社が入園料や物販等の収益で補う。

また、市の財政負担として、リニューアル工事費や設備・車両購入費を負担してもなお、現状運営費2.92億円/年より、0.46～0.21億円/年（6.9～3.15億円/15年）の削減効果を見込めるものであり、収益事業との相乗効果により、動物公園の安定した経営が期待できる。



※ ⑤', ⑥'の費用については、新たな運営会社が民間のノウハウを活かしながら、実施方法の見直しや、収益、寄附等による財源の確保に努め、市費の負担軽減を図る。



※ 上記以外に、2022～2036年の15年間で、動物病院の改築費や設備車両の更新費、動物購入費などの支出が見込まれるが、当該費用については、企業版ふるさと納税の活用など、新たな運営会社とともに財源の確保に努めるものとする。

8 運営体制

(1) 新たな動物公園の運営会社

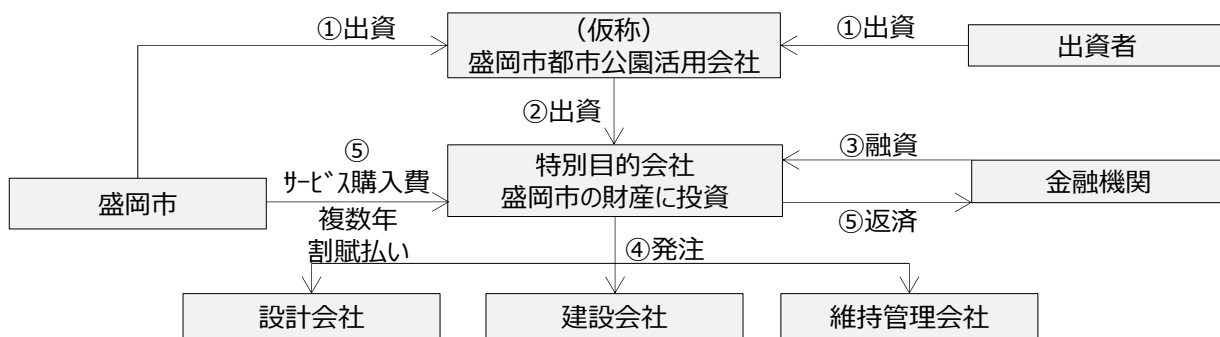
動物公園の運営を担うとともに、岩山エリアの事業開発をはじめ複数の都市公園の活用を目的とした（仮称）盛岡市都市公園活用会社（以下「活用会社」という。）を新設し、運営を担わせることが望ましい。

また、動物公園という市民の財産を活用して事業を実施することから、事業には一定の公共性が求められる。公共性の確保と市の政策的な意向を反映するためにも活用会社に対しては市から出資が必要である。

(2) 活用会社と特別目的会社の業務と役割

活用会社は、動物公園の管理運営として、動物飼育展示事業、教育普及事業、収益事業、広報等を行い、収益性のある都市公園の利活用を支援し、市の財政負担の低減と公園及びその周辺エリアの価値を上げる役割を担う。

特別目的会社は、金融機関から資金を調達し、設計、建設及び維持管理会社に発注し、施設整備及び施設保守点検を行う。



【想定される獣舎改修ストラクチャー】

(3) 経営方針

来園者に最高のサービスを提供し、「また訪れたい」という思いを持ってもらい、リピーターとなってもらうためには、動物公園で働くスタッフの能力が最大限発揮される組織づくりが求められる。そのためには、スタッフ一人ひとりの多様性、創造性を生かし組織の目標達成を実現できるマネージャーの存在と一定の裁量権の下、スタッフ個人がやりがいを持って働くことができる環境が必要である。

(4) 活用会社の設立時期

ア 施設老朽化の状況を勘案すると2020年度に公社から活用会社に運営を移行

イ 2018年度末までとなっている公社との指定管理契約を1年延長

ウ 2019年度に活用会社を組成し、継続雇用を希望する公社職員に対して新たな経営者から雇用条件を提示する必要がある

(5) 活用会社の概要

ア 資本金990万円

イ 事業資金調達として、市中銀行のほかにMINTO機構からの資金調達を想定

ウ MINTO機構から資金調達する条件として、資本金の公的資金比率を50%未満とする必要がある

エ 市の出資比率は 49パーセント 490万円

【参考】 再生事業計画における取組実績等(2020年7月末現在)

年 月 日	取 組 内 容
2019年7月8日	盛岡市等が出資し活用会社を設立 ◇会社概要 ・名称：株式会社もりおかパークマネジメント（以下「MPM」という。） ・資本金：990万円 ・株主：12者 ※市の出資金490万円（出資比率49パーセント） ・主な業務内容：動物公園の運営管理（指定管理者），再生事業プランの実施や収益事業コンテンツの開発（代理人業務）など
〃 8月26日	市とMPMにおいて代理人協定を締結
〃 9月9日	市とMPMにおいて動物公園再生事業計画業務委託契約を締結（ランドスケープのデザイン，特別目的会社組成業務など）
2020年2月27日	MPMが特別目的会社を設立 ◇会社概要 ・名称：盛岡市動物公園再生事業株式会社（以下「SPC」という。） ・資本金：500万円（MPMの100パーセント出資） ・主な業務内容：再生事業における施設整備，施設保守点検など
〃 3月17日	MPMがランドスケープのデザインを作成 ※概要は別紙のとおり
〃 4月1日	動物公園の運営を公社からMPMに移行 ※同日付けで公社が解散
〃 6月26日	盛岡市議会6月定例会において，動物公園再生事業に必要とする経費に係る債務負担行為（21億9,646万円）が議決
〃 7月22日	市，MPM，SPCの三者間で「施設整備等に係る全体協定」を締結

◇ 動物公園の愛称「ZOOMO(ズーモ)」について

本事業計画に基づいた事業の開始に伴い，より多くの方に動物公園に親しみを持っていただけるよう，愛称を定めた。

（語源）・ZOO MORIOKAの略

- ・これからもずっと永く盛岡と共にあり，もっと市民にも動物にも愛される動物公園でありたいという思い
- ・物語を語るときの方言，「～ずもな」から。永く語り継がれ，多くの方の記憶にも記録にも残るものになりたい，動物のことや身近な自然の大切さ・環境との関わりを伝える命の語り部でありたいという思い
- ・理念である動物の福祉の体现のため，野生動物や環境保全にフォーカス（「ZOOM_ON」）すること，盛岡が抱える都市の課題を動物公園を通じて一つでも多く解決できるような場所になりたいという思い